アメリカ文化とユーモアについて

関連するSDGsの国際目標

人間文化学部　国際コミュニケーション学科
講師　　瀬戸　貴裕

研究分野：アメリカ文学

概要：アメリカ文学の中でもユーモアを用いて社会問題を批評する風刺作品について研究しています。マーク・トウェインなどが主な研究対象です。

■ユーモアとは何か

ユーモアという言葉自体は単に可笑しみといった意味ですが、ユーモアが社会において果たしている役割は多岐にわたります。相手をリラックスさせたり、共同体の絆を強めるなど、ポジティブな用いられ方がユーモアの主な用いられ方だと一般的には思われていることでしょう。しかし、これが必ずしもケースでないことは、アメリカの文化や歴史を見るとよくわかります。かつてアメリカで流行したミンストレルショーは、白人が黒人に扮して、黒人のステロタイプを面白可笑しく演じることで、人種的優位性をパフォーマンスとして表象するものでした。このように、ユーモアとは他者の疎外、迫害、周縁化をする際にも大きな力を発揮するものです。私がアメリカの風刺作品を研究する中で得た気づきとは、アメリカはこうして人種的他者を嘲笑する笑いがその文化の一部をなしていた、あるいは今でもなしているということです。日本においてもこれと同じ現象が見られても不思議ではありません。私たちが笑うとき、それは誰を対象として、何を理由に笑っているのか、よく自省しなければなりません。

■ユーモアに関する研究成果

もちろん、先述したように、ユーモアにはポジティブな効果もあります。マーク・トウェインという作家はユーモアを用いて鋭く社会問題を風刺した作家でした（もちろん、そのユーモアは完全に偏見や差別から自由というわけでもないのですが）。私がトウェインの晩年の作品であるWhat Is Man?という作品について執筆した論文が、間もなく日本マーク・トウェイン協会が発行する『研究と批評』という雑誌で公開される予定です（2024年4月現在）。この論文では、大まかに言えば、いかにトウェインがユーモアを用いて読者に創造的で柔軟な思考を促しているのかについて執筆しています。ユーモアが仕事の生産性を上げる、創造力を高めるなどの効果があることは科学的な研究からも実証されています。ユーモアを正しい方法で使えば、私たちは自らの偏見を解きほぐし、それを自由で平等な社会を作るための手段のひとつにすることができるかもしれません。（下の画像は2018年に刊行されたものです。）

